

研究授業通信

古枝小学校

研究主任 松林 諒

令和四年度 6月17日

4年生「跳び箱運動」

第3回目の授業研究は、4年生の跳び箱運動を行いました。
事後検討会を終えての、先生方の感想です。

研究の内容①「学習カード」

- 自己評価の三角形は、子どもたちの気持ちがあがって良かった。毎回の三角の大きさが大きくなっていくばかりではなく、途中で小さくなっている子もいて、自分の気持ちを素直に表現できていることが分かりました。
- 見やすく書きやすいカードを工夫されていた。
- 実技（めあてを達成させることができた等）を頑張っている、めあて・ふり返りを未記入の児童はそれでよしなのかどうか評価は難しい？
- 書くことが負担にならない量としてはよかった。
- 見開きで上に技の形態図、下に記入用紙という使い方になっていて、子どもたちも形態図を見ながらめあてを立てていたので、使いやすそうだった。
- 記入量を少なくする工夫がしてあり、書くことが苦手な子どもたちにとっては書きやすかったと思う。
- ふり返りの視点やポイントが書いてあるととっても分かりやすかったかもしれないです。
- できた技にシールをはることで、一目で分かるようになっていてよかった。シールが増えることで達成感を味わっているのでは。
- 一枚で単元を通してふり返ることができる形式の学習カードになっていた。自分の成長を実感できるところが良い。1時間あたりに書く量が子どもに負担にならない程度且つ、きちんとめあて・ふり返りが書けるようになっていくところが良い。
- チャートの利用。自分の学びを視覚的に捉えることができるところが良い。チャートの形を見てふり返りを記述することができたり、チャートのへこみ部分を次の時間で頑張ろうと思えるきっかけにもなりえたりする。
- 活動時間を確保するために記述する量はあれでちょうど良いと思う。
- チャートは新しい取り組みとして良かったと思う。子どもが毎時間自分の頑張りをすぐ見れるし、次の時間の活力となる。
- めあて2の「挑戦すること」のふり返りは「うまくできた」技と「うまくできない」技の両方ふり返りが書けるように設計するとか、（場所）で（工夫）に気を付けて練習したら（できた・できなかった）と具体的に書かせるように設計するとか、工夫が必要。
- チャートは児童の実態が把握しやすい。ただ、「学び方」を「技の工夫」とか「協力」とか、学年や単元に応じた項目に変えた方が、より明確に把握できると思う。
- 必要かつ十分な内容で、書く分量としても適当であった。
- 5時目ということもあり、子どもたちは学習カードの記入に慣れていて、そのことから子どもたちの実態に合った学習カードであったことがうかがえた。
- 記述のふり返りだけでなく、レーダーチャートに表したことで、自己評価を視覚的に

捉えることができ、各自の推移も分かる。また、子どもたち自身が学びの視点やバランスに自然に気付くことができるのでは、という期待がもてる。

- 個別最適と協働の一体化がめあてとすることで、学習カードにも友だちが書くスペースがあってもおもしろいのかなと感じました。話の中では「個別最適を目指す中で、協働性が生まれる」ということもありましたが、やはり協働性を教師が仕組むことも大切かなと感じました。

研究の内容②「めあて・ふり返り」

- ふり返りを通して、できそうな技ができた子どもたち・・・を全体に生かすことはできないだろうか。個→全体 全体→個 双方向によるレベルアップを。
- めあて2のふり返りが、次の時間に繋がるように、具体的かつ簡潔に書けるような工夫を考えていきたい。
- 子どもたちのふり返りがもっと膨らむように、技のポイントを子どもたちと共有した方がいいと思った。
- めあて達成のため、教師が子どもたちの様子を見取りやすくするために、取り組む技に手を挙げさせるだけでなく、マグネットで示してもよいかな？と思った。
- めあてを選択制にしたことで、めあて設定の時短ができた。また、焦点化され、取り組む技を意識することができた。
- ふり返りに何を書かせるか、与えられた視点を捉えて記述すべき。記述内容にばらつきがあった。ふり返りは児童に価値づけたいことを共有することにも活用できると考えると、授業づくりに生かしたい視点（どんなことに気を付けたか・困ったこと等）を与え、それを捉えさせて記述をさせたい。共有したことを児童がきちんと捉えられれば、視点を持って学ぶことができる。
- ふり返りは、短時間でも書けるようになっていてよかった。
- 授業を重ねていくうちに、めあて①とめあて②の違いが子どもたちの中にも意識できていたと感じた。
- ポイントを得ているふり返りができている子どもを意図的に指名することで、ふり返りの時間をより深めることができた。
- 「○○に気を付けたら○○が跳べた」のように、気を付けたポイントを書けると、次の活動（アドバイス）にいかせるのではないかと思った。
- 技のポイントなどを意識して書かせると学習場面に繋がると思えた。
- ふり返りの時に「うまく跳べたポイント」等を発表させて、次のめあてに繋がるようにさせることは良いことだと思った。それが協働的な学びに繋がっていく。
- どんなめあてを持ってほしいか、どんなふり返りを書いてほしいかを、教師側が明確に持っていることが大切だと感じました。そのためにも、運動量の確保も大切ですが、ポイントを共有する時間も大切だと思います。そのためにも、学習カードの簡潔さ、書きたくなるものを作るのは必要だと思います。

研究の内容③「教材・教具の工夫」

- 色々な高さや方向から跳べるように工夫されていて子どもたちも次から次へと挑戦していてよかった。
- 着手・着地・踏み切り等のポイントを確認すればタブレットもうまく活用できるので

はないかと思った。

- 跳び箱、マットの準備もとても速く協力してできていた。
- 場づくりのために豊富なマット、跳び箱、補助具が活用されていてよかった。
- セーフティマットの活用も考えていきたい。
- 停滞している子どもたちにとって、場づくりが大変大事なことだと感じた。めあて②でかかえ込み跳びが怖くて全然できないと言っていた(跳ぼうともしない)子どもが、着地用のマットを何枚も重ねて恐怖心を取り除いてあげたことで、かかえ込み跳びの練習に何度もチャレンジするようになった。
- 場の設定がたくさんあって良かった。子どもたちはマット等を使って自分たちでめあてを達成できるように工夫していたところも良かった。
- めあて2を達成するための場づくりができていた。
- 児童それぞれに課題があり、それらを克服するために、めあて2の場の種類を増やす。また、それぞれの場がどんな課題を克服するために役立つのか、児童が理解できて練習すると、よりめあての達成に近づくとと思う。(教師の指示が必要：～に気を付けて練習すると、～ができるようになるよ。)
- 手本動画の活用。児童が見たいときに手本動画を見ることができ、参考としていた。
- タブレットを必要に応じて使っている子もいれば、そうでない子もいた。技のポイント(着手・踏み切り)などを伝えておき、撮影の視点を共有しておく。それが協働的な学びにつながる。
- 場やお手本動画の活用はとても良かったと思う。
- 掲示物の活用の仕方を工夫できないかなと思った。ふり返りにも使えると思う。
- めあて2の場づくり(挑戦技の練習の場)紹介「この練習の場では○○跳びの練習ができるよ。友達と話し合っ、高さ・向き・マットの枚数など、自分たちで変えながら練習できるよ。」などの、場の説明が必要。
- 加藤先生も言っていたけど、「個別最適な学び」をまず高めるための場づくり(場の工夫)についてこれからの研究で深めていきたいと思う。
- 学習の場の設定が有効であったことが、子どもたちが生き生きと学習に臨む姿に表れていた。
- タブレットは教具としてとても有効なので、活用の仕方について、今後模索していければと期待している。
- 形態図は子ども達が自分の動きをイメージするのにいいアイテムだなと感じました。
- 止めたり戻したりできる動画は、どの単元でも有効だと思います。いつも体育館に1台常設してあるといいですね。

その他

- 学習カードから、一人一人のめあてや課題、つまずきを洗い出し、手立てと見取りを行っていくことが必要だと思う。子ども達一人一人の主体的な学びを教師としてどのようにバックアップしていくかということについて考えていく必要がある。
- 子どもたちも「できた」と感じ合え、単元の目標の達成になっていたと思います。そこには川崎先生の場の手立てや声掛けが繋がっていると感じました。川崎先生ありがとうございました。
- 教師の働きかけ。課題を克服するために児童に積極的に跳び方の指導を行っていた。算

数科で技能面がC評価の児童をB評価に上げるために個別に指導を行うのと同じように体育科でも「できない」→「できる」にするために、教師がつまづきを見つけ、積極的に指導を行うことで「できない」が続くことによる意欲の減退を防ぐことができる。そのような指導を行っていた。

- タブレット端末を活用していたが、視点を持って活用させたい。ふみきり・着手・空中姿勢・着地の4つのポイントは授業のなかで頻繁に声に出して常に意識させておくと、児童の目が向いて、撮影したくなるしかけになると思う。また、1時目の自分・〇時めの自分という視点で撮影させると、成長した自分を確認できる。
- 跳び箱が苦手な子どもたちが跳べたり跳べなくても前回より上達した時の先生の声掛けが、やる気にさせているのかなと思いつつながら参観させてもらいました。(一緒に喜ぶなど)
- 全授業参加させてもらいました。回数を重ねるごとに良い授業になっていったと感じています。子どもたちの活動量がしっかりと補償されていて、なにより子どもたちがいきいきと活動していたと思います。いろいろな技に挑戦する子がだんだん増えてきて、跳び箱が苦手な子供も場を工夫することで楽しみながらチャレンジしていた姿が印象的でした。本当にお疲れさまでした。
- 上学年グループのみなさんの熱心な話し合いに感心しました。それに応えるように川崎先生が努力されている姿に頭が下がりました。お疲れさまでした。
- 会話なしコミュニケーションの場が作れる学級の雰囲気素晴らしいと思えた。由佳先生はじめ高学年グループの先生方お疲れさまでした。
- 子どもたちが楽しそうに活動している姿が素晴らしかったです。準備と片づけも素早くできていてよかったです。お疲れさまでした。
- 子ども達が自分の課題に向かって一生懸命取り組んでいるのが印象的だった。だからこそ、もう少し児童同士の関わりがあってもいいと思ったし、そうしたくなるような声かけを教師が意識的に行うことが必要だったように思う。
- 加藤先生が言っていた児童A・B・Cをしぼってみるのは体育において有効的だと思います。
- 見学の先生が手助けするのはちょっと・・・。

研究の進め方

4年生「跳び箱運動」の事後検討会での加藤先生の助言を受けて、これからの校内研究の進め方を少し変更しようと思っています。

① 「授業観察カード」を使う

次回からは、指導案と合わせて「授業観察カード」を事前に先生方にお配りしたいと思います。3つの研究内容ごとに記入する欄を設けるようにするので、赤や青の付箋に書く前のメモとして活用してください。

② グループ協議の仕方

加藤先生の助言で言われたように、協議の内容を焦点化したいと思います。そのために、付箋を貼る時に『学習カード』『めあて・ふり返り』『教材・教具』で仲間分けをしながら広用紙にまとめてください。そして、良かったところと改善点が出そろったところで、『〇〇したくなるしかけ』『もっと〇〇したくなるしかけ』はないかという視点で、良かったところや改善点について検討していただければと思います。各グループで検討していただいた『〇〇したくなるしかけ』について、全体で発表していただきたいと思っています。

授業観察カード

研究主題

主体的に学び続ける児童の育成

～体育科における「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体として捉える単元デザインの確立を目指して～

観察のポイント

それぞれの研究内容について、成果と課題を記入しながら、自分だったらどうするかなと『〇〇したくなるしかけ』を考えていただけるといいかと思います。

学習カード

めあての立て方・ふり返りのさせ方

教材・教具の工夫

その他